Code4Lib カンファレンス 2014

日程 2014年3月24日(月)～27日(木)

場所 米国ノースカロライナ州ローリー (Raleigh, N.C.)
シェラトン・ローリーホテル

主催 Code4Lib

情報管理 57(3), 204-207, doi: 10.1241/johokanri.57.204 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.57.204>)

主に北米の図書館に勤務しているシステムエンジニアや司書などソフトウェア開発やシステム管理に携わる者が中心となって形成されているコミュニティ Code4Lib が毎年開催しているカンファレンスがある。おおむね毎年2月に開催されるこのカンファレンスだが、今年は3月の最終週に開催された。筆者は2010年から毎年参加しており、2014年3月に米国ノースカロライナ州のローリーで開催された Code4Lib カンファレンス 2014 にも参加した。

2010年を皮切りに日本からは毎年数名の参加があるが、今年の日本からの参加者は筆者と高久雅生氏(筑波大学)の2名だけだったようだ。このカンファレンスには北米だけでなく、数は多くはないが世界各地から参加がある。たとえば、エジプトやインドネシア、北欧などを含む10か国から、今年は351名の参

加があった。昨年は400名を超えていたが、それでもいままでの中で2番目に参加者の多い大会であった。

Code4Lib は、メーリングリストやIRC (Internet Relay Chat) を中心にコミュニケーションをとることでコミュニティを形成しているが、1年に1回大規模なカンファレンスを開催するなど、顔を合わせたうえでの活動も大事にしている。Code4Lib コミュニティの立ち上げメンバーの1人である Dan Chudnov 氏に聞いて知ったカンファレンス運営面でのこだわりも参考になると思うので、その点もあげながら紹介したい。

Code4Lib カンファレンス 2014 は、プレカンファレンスが1日、本カンファレンスが2.5日行われた。プレカンファレンスはさまざまなテーマで個別の部屋

会場風景

に分かれて運営され、そのほとんどがワークショップ形式のものであった。たとえば、WebOPACのためのシステムBlacklightを改良してみようといったように、実際にシステム開発をして手を動かしてみる形式のものがあった。1日かけるワークショップが5件、半日ワークショップが14件あった。私はCCLAM (Computational Linguistics for Libraries, Archives and Museums) のセッションに参加した。図書館や文書館、博物館でのデータマイニングや自然言語処理などがテーマのものであった。事前の告知では、自分で何かデータをもってきて一緒にやってみようと思ったのだが、午前中は事例報告で午後はひたすらディスカッションであった。

プレカンファレンスでは、パラレルセッションで同時に何件ものセッションが並行して行われたが、本カンファレンスの発表セッションは、すべてシングルセッションとなっている。同じ発表を全員が聞いて共有し、ディスカッションしたいということまでこれが1つのこだわりだそうだ。本カンファレンスの発表セッションは、基調講演2件と通常発表23件、ラ

イトニングトークと呼ばれる5分のショート発表が27件あった。ライトニングトークに関しては、カンファレンス開催時に発表申し込みを行い、申し込みの早い者順に発表が決まるという方式がとられている。これは、カンファレンスのその場で発表したくなることがあるだろうということから、そういう発表申し込み・採択形式にしているのだそうだ。

今年の発表は、可視化やコミュニティ形成を扱ったものが多かったように思う。基調講演はSumana Harihareswara氏による“UX Is A Social Justice Issue”であった。また、もう1つの基調講演、Valerie Aurora氏の話 Roy Tennant氏が聞き出す対談形式でやるという一風変わったものであった。発表セッションについては、YouTubeを使った動画配信が行われ、録画もあるので興味がある方は見てほしい。

このカンファレンスでは、発表セッションのほかにも、議論したいテーマを提案して、グループに分かれて議論するブレイクアウトセッションもある。このセッションは初日と2日目に行われた。テーマにはたとえば、BIBFRAMEについてなどがあった。

今年は、カンファレンスのプログラムとして図書

ライトニングトーク申し込みの風景

Hunt Library

館見学があった。ノースカロライナ州立大学のHunt Libraryを見学した。できたばかりの図書館で、入り口を入ってすぐに自動書庫がガラス越しに見えるゾーンがあり、壮観であった。ほとんどの本はこの自動書庫におさめられ、閲覧室にはほとんど本棚がなく、カラフルな机やベンチがたくさんある図書館であった。また、大画面でゲームができるコーナーなど、ICTを活用したさまざまなゾーンがある図書館であった。

ここからは、カンファレンス運営の工夫について紹介したい。休憩あけのセッションでは人の集まりが悪いということがよくあると思う。このカンファレンスでは、カンファレンス参加者が席に着くインセンティブを高めるために“Give away”というしかけがある。これは、参加者リストの中からランダムに人を選んで、その人がちゃんと席に着いていたら、好きな本がもらえるというものである。私も初めて参加した会議で、運よくこのラッキーな参加者に選ばれ、名前が突然呼ばれて、わけもわからず前に出たら、好きな本を選べ、と言われてびっくりした記憶がある。ここ数年は、紙の本だけでなく電子書籍1冊分のライセンスがもらえるといったクーポンが多くなっており、時代の変遷を感じる。なお、この“Give away”でもらえる本はこのカンファレンスのスポンサーから提供されている。

このカンファレンスで私がいつも感心するのは、電源の多さである。たしかに参加者のほとんどはノートPCを開いている。ほぼ1人に1つ電源が用意されているのはすごいことだと思う。また、これはほぼ全員がPCを使える環境にあること、ネットワークが用意されているからこそ実現できることだとは思っている。カンファレンスでは、配布資料が一切ない。受付では、名札とTシャツを受け取るだけである。では、どうやって、さまざまなアナウンスや発表資料を受け取るかというと、すべてはWebサイト上のWikiシステムに掲載されている。参加者はそのWikiシステムにアクセスし、資料を見ることができるだけ

ではなく、発表者も自由に自身の発表資料を追加することができるになっている。このWikiはカンファレンス中のさまざまなことに活用されている。「Newcommer's Dinner（ニューカマーズディナー）」というイベントを例にWikiの活用例を紹介する。ニューカマーズディナーとは、初めてカンファレンスに参加する人（ニューカマー）とたくさん参加したことのある人（ベテラン）と一緒にディナーに行くイベントである。ここで、Wikiシステムには最初、レストラン名が記入されているだけである。あとは、そのレストランに行きたいニューカマーとベテランがそれぞれ自分の名前にニューカマーなら（n）、ベテランなら（v）を付けて記入していくというわけである。各グループに1人はベテランが入るようにし、そのベテランが幹事となりレストランの予約や集合方法・集合時間を決めて、同じグループの人を案内したりする。Wikiなので、自由に記入することができるため、目印はこれだよ、といったことなども書かれている。そのほかにも、参加者が好きなイベントを立ち上げ、たとえば、ダンスに行くイベント、ジャズを聴きに行くイベントなどがあった。Wikiを通して告知し、募集することができ、参加者同士でさまざまな交流ができるようになっている。

このように、Wikiを活用することで、カンファレンス運営者にできるだけ手間がかからず、参加者同士が自律的に運営にかかわれるようになっている点はカンファレンス運営として大変参考になると思った。カンファレンスとしての公式懇親会を用意しない代わりに、参加者同士で自発的に行うことを尊重し、このようにWikiで参加者がイベントを告知・募集しやすくしている。さらに、カンファレンス開催地は、安くておいしいレストランがたくさんある場所を選ぶようにしているのだという。ところで、なぜいつも寒いところで寒い時期に開催するのかと聞いたところ、寒い時期に寒いところで開催するとシーズンオフで宿泊費や交通費が安いいため、多くの人に参加しやすいから、だそうである。

とりとめなく気になったことをあげてみたが、カンファレンスの発表についての動画や資料などは、カンファレンスのスケジュールについてのWebサイト¹⁾を参照されたい。また、筆者や高久氏によるカンファレンス中のツイッター投稿をまとめたもの²⁾があるのでこちらも参考になると思う。図書館に関連するシステムのホットな話題がつぶさに得られる点や、多くの関係者と人的ネットワークがとれる点などはもちろん、このコミュニティのウェルカムな雰囲気、何よりとても楽しいので毎年参加してい

るが、今回の会議も有意義なものであった。

このカンファレンスに触発されて、昨年、日本でもCode4Lib JAPANカンファレンス2013³⁾、⁴⁾が開催され、Code4Lib JAPANカンファレンス2014⁵⁾も今年の夏に開催される予定である。こちらも本家に負けず劣らず楽しく参考になると思うのでぜひ参加をお勧めする。

(国立教育政策研究所 江草由佳)

参考文献

- 1) Code4Lib 2014 Conference Schedule. <http://code4lib.org/conference/2014/schedule>, (accessed 2014-04-18).
- 2) arg編. Code4Lib Conference 2014 #c4l14. togetter. <http://togetter.com/li/647848>, (accessed 2014-04-18).
- 3) 江草由佳. Code4Lib JAPANカンファレンス宮城県南三陸町にて初の開催. カレントアウェアネス-E. 2013. no. 246, E1486. <http://current.ndl.go.jp/e1486>, (accessed 2014-04-16).
- 4) Code4Lib JAPAN Conference 2013. Code4Lib JAPAN. 2013, <http://wiki.code4lib.jp/wiki/C4ljp2013>, (accessed 2014-04-16).
- 5) Code4Lib JAPAN Conference 2014. Code4Lib JAPAN Conference 2014. <http://wiki.code4lib.jp/wiki/C4ljp2014>, (accessed 2014-04-16).